日本語の自然なアクセントはどのように作られるか

—「句アクセント」の生起条件に関する研究—

竹村和子
麗澤大学大学院 言語教育研究科
ktakemur@cs.reitaku-u.ac.jp

0　問題の所在と先行研究

「りんご」「かぎ」などの単語は、助詞などの付属語がついて「りんごが」「かぎが」という文節になり、動詞や形容詞は「たべる」「あかい」など、辞書形のままでも文節になりうる。これら文節のアクセントは語アクセントから導き出される。しかし、文節が連なった「あかいかぎが」や「りんごをたべる」のようなとき、元の単語や文節のアクセントをそのまま連ねて、「あかいかぎが」「りんごをたべる」と発話すると、必ずしも自然な発話にならない。それらは、日常会話ではしばしば「あかいかぎが」「りんごをたべる」のようなアクセントで発話される。

文節が連なることを、神保(1925)は「連結」といい、連結によってできたアクセントを「準アクセント」と呼んでいる。川上(1957)は神保(1925)の「準アクセント」を踏まえた上で「句」の概念を提示している。窪薗(1997)は複合語を「アクセント句」とし、文節が連なった音調を「イントネーション句」としている。

本稿では、「あかいかぎが」のような、文節が連なった際にひとまとまりのアクセントで実現される 1 つの音声フレーズのことを「アクセント句」と呼び、その句全体の音調を「句アクセント」と呼ぶことにする[1]。句アクセントは単に語や文節のアクセントが連なったものではなく、文節が連なることによって生じる、アクセント句全体の自然な音調である。本稿では文節が連なった句におけるアクセントの生成規則を述べた上で、どのような音韻論的解釈が可能かを述べる。

[1]本稿に言う「句アクセント」や「アクセント句」における「句」は、統語論的な単位としての「句」とは別の音韻論単位である。

1 句アクセントの定義

文節が連結し、1 アクセント句となるためには、句アクセント化のための規則が必要である。その規則が適用される際には、連結した要素全体が 1 つのアクセント句となる。

たとえば、アクセント句「あかいかぎ」は、前の「あかい」の最後の拍の高さに従って、「かぎ」のように高く続く。さらに助詞(例えば「が」)がついた「あかいかぎが」は、2 拍目の「か」から高く続いたアクセントが、核「ぎ」の後で低くなる。このように、アクセント句の最初の上昇から高く続いた音調がずっと続く、もしくは核のあるところで下がる。「かれのくつ」は 2 拍目から低い。「くつ」は、この場合、句アクセント化が起こるため、「つ」は低く続く。アクセント句の 1 拍目に核がある場合は、次に核がある語や文節が来るまでずっと低い[2]。

これらから、句アクセント化のパターンとして、2 拍目からの上昇がずっと続く、もしくは 2 拍目からの上昇が核まで続いた後低くなる、もしくは、高始まりで 2 拍目から低いアクセントがそのまま低く続く、ということが言える。

句アクセントの定義をまとめると、

[2] 「かれのくつ」に助詞「が」が付いて「かれのくつが」と発音された場合には、「つ」にも核があり、その核はキャンセルされない。そのため「かれのくつ」は 1 アクセント句となるが、「かれのくつが」は 2 アクセント句となる。また、音声レベルでは、「かれのくつが」は、「か」が高く(H)、「れのくつ」までが低く(L)、「が」をさらに低くする(LL)のように発音されるというような、いわゆる“アクセントの滝”の現象が生ずることもあるが、H と L、L と LL の高低の音韻論的対立は保持されていることから、本稿ではそうしたケースは含めずに考察する。

(ⅰ)上昇が 1 度だけある
(ⅱ)下降が 1 度だけある
(ⅲ)上昇と下降が 1 度ずつある
音韻論的単位である、ということができる。

そして、連結によってできた音のまとまりが、上の定義のどれかに当てはまり、1 つの音声フレーズとして実現されるとき、句アクセント化規則が適用されていると言うことにする。

文節のアクセントはその単語や助詞に固定して存在するのに対し、句アクセントは、文節アクセントの単純な“和”ではないアクセント形が自然な発話の中で随意的に生成されるという意味において、文節アクセントとは別の概念(アクセント単位)である。また、句アクセント化規則は常にどのような文節にも適用できるわけではなく、適用される文節の数も様々である。

２　句アクセント化規則の適用条件

ここでは、2 文節以上の連結について述べた上で、句アクセント化規則の適用条件について考察する。

２．１　２要素連結の場合

共通語のアクセントの型は平板型・頭高型・中高型・尾高型の 4 種類あると言われている。それらすべての型が 2 つ連結するパターンは 16 通りある。表 1 では、前部要素と後部要素のアクセントの型を示し、句アクセント化規則の適用の有無、また例を示した。表中で、前部要素が平板型のときは①、頭高型のときは②、中高型のときは③、尾高型のときは④とした。①/②/③/④それぞれに後部要素 a/b/c/d が付き、それぞれ順に平板型、頭高型、中高型、尾高型である。「○」は句アクセント化が起こる環境であることを示し、「×」は句アクセント化が起こらないことを示す。「平」は平板型、「頭」は頭高型、「中」は中高型、「尾」は尾高型の略である。句アクセント型は、句アクセント化した連結全体のアクセントの型を記したものである。

ここでは例として、「連体詞＋名詞＋付属語」と「名詞＋付属語＋名詞」の連結を示す。付属語は助詞とする。それぞれ付属語が後ろに付いた要素を 1 文節とする。つまり、「連体詞＋名詞＋助詞」では連体詞を 1 つの文節とし、名詞＋助詞を 1 つの文節とする。また、「名詞＋助詞＋名詞」では、名詞＋助詞を 1 つの文節とし、最後の名詞を 1 つの文節とする。

表 1　2 文節の連結

	前部要素のアクセント型	後部要素のアクセント型	句アクセント化	例：連体詞＋[名詞＋助詞]	例：[名詞＋助詞]＋名詞	句アクセント型
①a	平	平	○	あのえんぴつが	こどもがびょうき	平板
①b	〃	頭	○	あのもみじが	わたしがあに	中高
①c	〃	中	○	あのたまごが	わたしがいとこ	中高
①d	〃	尾	○	あのかぎの	わたしがおんな	尾高
②a	頭	平	○	どんなえんぴつが	あにがきょうじゅ	頭高
②b	〃	頭	×	どんなもみじが	あにがきょうし	×
②c	〃	中	×	どんなたまごが	あにがはなや	×
②d	〃	尾	○	どんなかぎの	あにがだいじ	頭高
③a	中	平	○	いわゆるえんぴつが	いとこがびょうき	中高
③b	〃	頭	×	いわゆるもみじが	いとこがりょうし	×
③c	〃	中	×	いわゆるたまごが	いとこがはなや	×
③d	〃	尾	○	いわゆるかぎの	いとこがおとこ	中高
④a	尾	平	○	こんなえんぴつが	おとうとのびょうき	平板
④b	〃	頭	○	こんなもみじが	おとうとのあに	中高
④c	〃	中	○	こんなたまごが	おとうとのあしあと	中高
④d	〃	尾	○	こんなかぎの	おとうとのあたま	尾高

文節のアクセント型は、語の型とは少し異なる。付属語をつけると、平板型は例えば「えんぴつ」→「えんぴつが」のように平板型の文節となり、中高型は「たまご」→「たまごが」というふうに中高型の文節となり、頭高型は「もみじ」→「もみじが」のように頭高型の文節となる。これらは文節になっても全体のアクセント型は変わらない。しかし、尾高型では付属語が下がるため、「かぎ」→「かぎが」というふうに中高型の文節になる。そして、尾高型の語に付いても高く続く助詞「の」の場合は、「かぎの」となり、「かぎのが」などのようにさらに付属語がつくと、付属語が下がるため平板型の文節ではなく、高く続いた助詞「の」がついた要素は、尾高型の文節となる。

①a から④d までのうち、句アクセント化規則が適用されるのは、①abcd、②ad、③ad、④abcd である。つまり、①と④はどの組み合わせも句アクセント化する。②と③はそれぞれ ad だけが句アクセント化する。これらはいずれも、前・後部要素に平板型もしくは尾高型を必ず 1 つ以上含んでいる。逆に言えば、頭高型と中高型のみの組み合わせでは、句アクセント化規則は適用されない。生成された句アクセント型は、①a と④a は平板型、①bc と③ad と④bc は中高型、②ad は頭高型、①d と④d は尾高型になる。

２．２　３文節以上の連結の場合

ここでは、3 文節と 4 文節の連結のパターンについて分析する。3 文節の連結の組み合わせは 64 パターンである。表は省略するが、そのうち句アクセント化規則が適用されるのは 32 パターンであり、すべてに共通するのは、3 要素に必ず 2 つ以上の平板型もしくは尾高型を含んでいる点である。逆に言えば、2 文節以上が頭高型もしくは中高型の場合は、句アクセントは適用されない。

4 文節の連結の組み合わせは 256 パターンある。そのうち句アクセント化規則が適用されるのは、80 パターンである。それらに共通するのは、4 要素に必ず 3 つ以上の平板型もしくは尾高型を含んでいる点である。逆に言えば、2 文節以上が頭高型もしくは中高型の場合は、句アクセント化は適用されない。

この 3 文節以上の連結の場合、文節が一つ一つ連なって「文節＋文節＋文節＋…＋文節」のようになっていくとも考えられるが、どんなに長い連結であっても、すでにできあがった 1 アクセント句に新たな 1 文節が付け加わって、「1 アクセント句＋1 文節」のように連なっていくとも考えられる。例を挙げると、次のようになる。

(1) a あの→平板型
　b あの＋きょうじゅは：
　平板＋平板→平板型の句アクセント
　　(あのきょうじゅは)
　c あのきょうじゅは＋バナナを：
　平板＋頭高→中高型の句アクセント
　　(あのきょうじゅはバナナを)
　d あのきょうじゅはバナナを＋かう：
　中高＋尾高[3]→中高型の句アクセント
　　(あのきょうじゅはバナナをかう)

(1abcd)は上から順番に 1 アクセント句に 1 文節が付け加わっている。表 1 にあてはめると、(1b)は①a、(1c)は①b、(1d)は③d に該当する。文節数にかかわらず、句アクセント化規則が同様に適用されている。

3 文節連結のときには、必ず 2 つ以上の平板型もしくは尾高型を含み、4 文節連結のときには、必ず 3 つ以上の平板型もしくは尾高型を含む。このことにより、句アクセント化規則の適用条件は、

　ｎ文節の連結において、ｎ－1 またはｎ文節が平板型もしくは尾高型であること

と、定式化することができる。品詞や語アクセントに関係なく、文節の連結パターンによりアクセント句が決まるのである。

2.1 で述べたように、2 文節連結の場合も、平板型もしくは尾高型を必ず 1 つ以上含む、という条件があった。このことから、上の定式は、3 文節以上の連結だけでなく、2 文節連結の場合にもあてはまると言える。

[3]一般に共通語の動詞のアクセントは平板型と中高型、そして例外として頭高型があるとされる。名詞に付属語が低く付く語のアクセントは尾高型であるとされている。同様に、平板型の動詞に付属語がつくと、付属語が下がる場合がある。本稿では文節のレベルで考え、「かりる」や「する」のようなアクセントの動詞は尾高型に分類する。

３　句アクセントの自立性

３．１　句アクセントの括り方の非関与

表 1 では、後部要素に付属語がつく場合と前部要素に付属語がつく場合の例の全てのパターンにおいて、句アクセント化規則の適用と、生成された句アクセント型が同じであった。このことから、句アクセントの生成が、どこに付属語がつくかということとは関係なく、また語のレベルのアクセント型によるものではないことがわかる。

3 文節以上の連結の場合は、さまざまな括り方が考えられる。(1abcd)では文節を順に連結したが、括り方を変えることもできる。ここでは、(1c)とその括り方を変えた(1e)を例として示す。

(1)c　[あのきょうじゅは]＋[バナナを]…平板＋頭高
→中高型の句アクセント
(あのきょうじゅはバナナを)
e　[あの]＋[きょうじゅはバナナを]…平板＋中高
→中高型の句アクセント
(あのきょうじゅはバナナを)

(1e)は「1 文節+1 アクセント句」という括り方だが、アクセント型は全体で中高型となり、(1c)と同じである。このように連結のどの文節で括っても、全体の句アクセント型は同じである。どこからどこまでが句アクセントでなければならないということはなく、句アクセント化規則が適用される限り、1 アクセント句となる。

３．２　統語構造の非関与

次に、2 つの日本語のテキストを用いて、統語構造との関係を説明する。

(2)[きょうじゅが][じしょをかりた]→中高型の句アクセント
(3)[きょうじゅのじしょを][かりた]→中高型の句アクセント

(2)と(3)を統語構造に従って括ると、(2)’と(3)’のようになる。

(2)’きょうじゅが＋じしょをかりた…平板＋頭高
→中高型の句アクセント

(3)’きょうじゅのじしょを＋かりた…中高＋尾高
→中高型の句アクセント

(2)’は、「じしょをかりた」、(3)’は「きょうじゅのじしょを」が、それぞれ一括りとなる。「じしょをかりた」と「きょうじゅのじしょを」はどちらも句アクセント化規則が適用されており、1 アクセント句である。(2)’も(3)’も、全体の句アクセント型は中高型である。(2)’と(3)’は、統語構造は違っても、生成される句アクセント型は同じである。この例からもわかるように、句アクセント化規則の適用条件は、統語的な内部構造に影響されることはないのである。

付記

本研究は麗澤大学言語研究センター平成 19 年度プロジェクト応用言語学・語学教育部門 :「読解分野における総合的研究」研究成果の一部である。

参考文献

秋永一枝編(2001)『新明解日本語アクセント辞典』三省堂
上野善道（2003）「アクセントの体系と仕組み」上野善道編『朝倉日本語講座 3 音声・音韻』朝倉書店
川上蓁(1957)「準アクセントについて」『国語研究』7,44-60,国学院大学
（1961）「言葉の切れ目と音調」『國學院雑誌』62−5 国学院大学
金田一京助・柴田武・山田明雄・山田忠雄編(1972)『新明解国語辞典』1418-1426,三省堂
窪薗晴夫(1997)「アクセント・イントネーション構造と文法」『日本語音声 2 アクセント・イントネーション　リズムとポーズ』203-229,三省堂
神保格(1925)『国語音声学』187-193,明治図書
放送文化研究所編(1998)『日本語発音アクセント辞典新版』日本放送出版協会
馬瀬良雄・佐藤亮一（1989）「東京語アクセントの多様性」杉藤美代子編『講座日本語と日本語教育（上）』第 2 巻,明治書院
水谷修・大坪一夫(1971)『日本語教育指導参考書 1 音声と音声教育』文化庁